慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評 : 過剰な想像力の時代 : 鈴木智之・ 西田善行編著『失われざる十年の記憶』(青弓社、2012年)を読む
Sub Title	
Author	小谷, 敏(Kotani, Satoshi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2013
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.18 (2013. 7) ,p.166- 170
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のタイトル : 「書評 : 鈴木智之・ 西田善行編著『失われざる十年の記憶』」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20130706-0166

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：過剰な想像力の時代

―鈴木智之・西田善行編著『失われざる十年の記憶』（青弓社、2012 年）を読む―

小谷　敏

１.「失われた 10 年」言説への疑問

1990 年代が「失われた 10 年」として語られるようになって久しい。たしかに 1990 年代にはバブル経済が崩壊し、その直後から現在にまで続く長い不況の時代が始まっている。若者の就職状況をみても、バブル時代の売り手市場は一変した。90 年代の半ばには、「就職超氷河期」ということばさえ生まれている。1997 年には山一証券と北海道拓殖銀行が倒産し、その翌年の 1998 年には自殺者の数が 3 万人を超えている。明るい話は何もない。これらの事実から浮かび上がるのは、鬱々とした暗黒の時代の像である。

しかし、その時代を生きた私の記憶はそれとはいささか違っている。ある種躁病めいた空気が、90 年代のとくに前半の頃のこの国を覆っていた。ある日突然、老いも若きも、男も女も、髪を明るい色に染め始めたのである。コギャル、ブルセラ、ポケットベル、そしてルーズソックス。少女たちの元気のよさといったらなかった。「就職超氷河期」に「フリーター」になった若者は、時代の犠牲者のように語られている。たしかにそれも事実である。しかし、就職難をこれ幸いと好き勝手な道に進んでいった若者も少なくはなかった。

この時代には「経済敗戦」ということばが語られていた。「経済敗戦」がもたらした絶望感が、自殺者の急増を招いたことも事実である。しかし、右に述べた軽躁的な気分の高揚は、「敗戦」に伴う「焼け跡闇市」的解放感の所産だったのではないだろうか。経済に焦点を定めれば 90 年代は「失われた 10 年」であった。しかし 90 年代に日本のポピュラー文化は、「クールジャパン」と評されるまでにその魅力を増していった。経済の極度の停滞の一方で、文化的な活力が著しく高まった時代として 90 年代はとらえられるべきであろう。

一つの時代は多様な顔をもつ。そしてそのなかで人々は様々な生を送っている。それを「失われた 10 年」ということばで括ってしまうことへの違和感から本書は出発している。編者の鈴木智之は言う。「そのような総括的な語りに抗して、90 年代を生き延びてきた者たちのさまざまな物語を想起することが必要なのではないのか」（19 頁）。本書の 8 人の執筆者たちは、90 年代の様々な表象を分析の俎上に載せることでこの時代を生きた人たちが、「何かを夢見て、どこかにたどりつこうとしたのか」（同）を浮かび上がらせている。

２．８編の論文を読む

それではまず本書に収められた 8 編の論文の内容を紹介するところから始めよう。

小谷敏「書評：過剰な想像力の時代―鈴木智之・西田善行編著『失われざる十年の記憶』を読む―」
『三田社会学』第 18 号（2013 年 7 月）166-170 頁

角田光代『空中庭園』の読解を通して佐幸信介は、90 年代における「郊外」の表象を問うている。「郊外」は、自然的歴史的条件から切り離された快適な消費空間である。巨大ショッピングモールがリビングの代用であり、性愛はラブホテル、そして生誕と死は病院が担う。生活の多くが外部化されていることが「郊外」の特徴でもある。生活が排除された高層マンションのなかで角田の小説の作中人物たちは秘密を押し隠しながら生きている。

松下優一は、岩井俊二の映画「スワロウテイル」を俎上に乗せている。世界最強通貨「円」に惹かれて、日本に来た不法滞在移民が主人公のこの映画は、バブル期という「近過去」を舞台にしている。しかし観る側の理解は違った。悪に手を染めることをも辞さぬ、生命力にあふれた外国人が街に溢れ、巨大開発に失敗した湾岸に廃墟としての空き地が広がる映画のなかの風景を、当時の人々は「近未来」の東京を暗示するものと感受したのである。

1990 年代には、サイコホラーがブームになっていた。精神病質者の重ねる凶悪犯罪を、心理学的手法を用いる専門家たちが解決していくことが、このジャンルの定型である。サイコホラーのなかでも、凶悪犯・間宮が接触する人たちの心に影響を与え、次々と悪を「感染」させさていく映画「CURE」は異色の作品である。誰の心のなかにも「モンスター」が潜んでいるという「自己の他者性」の認識が、「CURE」の人気を生んだと加藤宏は言う。

90 年代には「記号的秩序を食い破るようにして唐突に現れ、そこに過剰な意味を集約させようとする」（120 頁）アレゴリカルな表現が流行したと鈴木智之は言う。酒鬼薔薇の犯行に際して彼自身が発したメッセージもその一つである。人間は死ぬものであって壊れるものではない。酒鬼薔薇がことばの誤用によって示した、「かけら」や「残骸」としての人体をみたいという欲望が阪神大震災によって喚起された可能性を鈴木は示唆している。

この時代に中韓は台頭し、日本は没落を続けていった。そして近隣諸国は日本に過去の戦争への反省を迫っていた。これに抗うように、日本国内では過去の戦争を正当化しようとする動きが活発化していた。列強に占領され混血が進む日本のなかで、「純粋種の日本人」が、占領者への徹底的な抵抗の末に全滅する世界を描いた村上龍『5 分後の世界』のなかに山家歩は民族の本来性という観念の徹底によって、それを乗り越える可能性をみている。

セーラームーンは、ただの美少女戦隊ものではなくセーラー戦士たちが無垢でありながらエロチックな（「エロかわいい」）存在であるが故に熱狂的な人気を博したと小林義寛は言う。この時代に女性たちはアイデンティティの複数性という観念を受け容れ、それと戯れていった。「同人」たちの「二次創作」の世界では、女性たちが想像のなかで「受け」、もしくは「立ち」の男性と同一化することによって現実の性を超越した世界に遊んでいる。

90 年代はアイドル冬の時代。テレビのベスト 10 番組も、アイドル雑誌も姿を消した。そうしたなかでアイドルたちは、ライブの場でファンと交流するようになった。「会いに行けるアイドル」の萌芽である。アイドルオタクのなかにも、「オタクであることの自意識と戯れる」、「メタ」の部分と「アイドルが本当に好き」という「ベタ」な部分とが併存するようになる。この両者を包摂しえた点に、後の AKB48 成功の秘密はあると塚田修一は言う。

個人のアイデンティティというミクロな次元においても、「本来性の神話」はこの時代に猛威をふるう。不幸な親子関係がもたらした子ども時代のトラウマによって「本当の自分」が抑圧されているというアダルトチルドレン（AC）言説が流行した。自らのトラウマの経験を歌うことによって浜崎あゆみは、若い女性たち、とりわけ格差社会が進行するなかで「居場所」を求める「ヤンキー」層の少女たちの「カリスマ」たりえたと西田善行は言う。

３.「本来性の神話」と「他者性との戯れ」

8 編の論文から浮かび上がってくるのは、「本来性の神話」と「他者性との戯れ」という二つのキーワードである。

佐幸論文が示したように、90 年代的な郊外における生活は、資本に管理され、まことに快適なものではあるが、およそ生きているという実感を得られるものではなかった。そしてシステムによって管理された退屈な日常は､終わることなく永続するように感受されていたのである。生の実感を欠いた当時の日本人の目には、金銭的成功を夢見る不法滞在移民たちのバイタリティーが眩しくみえたとしても不思議はない。そして酒鬼薔薇の行動も、人の命を奪うことによって、生の実感を得ようとした試みであったといえなくもない。

永遠に続くかと思われた退屈な日常も、自然と人間の暴力の前に、一瞬にして崩れ去るものであるという事実を阪神大震災と地下鉄サリン事件は、白日のもとに晒した。システムと日常性の崩壊に対して、当時の人々は、恐れと同時にある種の憧憬を抱いてもいた。「スワロウテイル」の湾岸の廃墟は、システムと日常の崩壊に対する人々のアンビバレントな思いを象徴している。「CURE」もそうであったように、この時代のポピュラー文化のなかに暴力の表象が溢れていたことは、このアンビバレントな思いと無関係ではないだろう。

オウム真理教の幹部には、多くの偏差値エリートが含まれていた。「酒鬼薔薇」少年も神戸の「普通」の中産階級家庭で育っている。普通の人たちのなかに「悪」＝「他者性」が宿っていることを強く意識させる事件が続いた。他方、マクロなレベルでは、急速に力を増してきた近隣諸国が、日本に対して過去に為した「悪」を認め謝罪するよう強く日本に迫ってきていたのである。個人のアイデンティティというミクロのレベルでも、国家の歴史というマクロなレベルでも、「自己の他者性」という問題が 90 年代には浮上していた。

「自己の他者性」という事実がつきつけられた時、二通りの反応が考えられるだろう。一つは、「他者性」の存在を否認し、汚れない、純粋な自己のという「本来性の神話」にすがりつく反応である。マクロなレベルでは、様々な歴史修正主義の流れが生まれていた。そして、ミクロなレベルでは豊かな可能性をもっていた「本当の自分」が、幼児期の親の間違った対応によってスポイルされたと主張するアダルトチルドレン言説が、これにあたる。経済の低迷が続くなかで人々は、自分は特別な存在であると思い込もうとしていた。

他方､「自己の他者性」もしくはアイデンティティの複数性と軽やかに戯れる風潮も生まれていた。「同人」たちの「二次創作」の作者や読者たちの多くが、実際の性的嗜好の面ではストレ

ートの女性たちであるにも関わらず、想像の世界では男性同性愛の当事者になりきって、倒錯的な喜びを享受している。セーラー戦士たちの女性性（エロ）と無垢さ（かわいい）の双方を大人のオーディエンスは同時に感受していた。そしてアイドルに対しても「メタ」と「ベタ」の二つの次元で、同時に愛でることが容認される時代になっていたのである。

90 年代は、強い女性たちの時代であった。セーラー戦士たちは闘い、ギャルたちはおよそ男に媚びるそぶりをみせなかった。そして「同人」たちは、想像のなかで男を犯すことさえ辞さなかった。他方、90 年代末に若い女性の「カリスマ」となった浜崎あゆみはトラウマを抱えた苦しさに「耐える」女性である。彼女の前向きでまじめで、ブルセラ少女たちとは対照的な生き方は「ヤンキー」層の女子たちから支持を集めていたのである。不況の一層の深刻化が、浜崎のようなタイプの「カリスマ」を召喚させたと言えるだろう。

４．いくつかの問いと今後への期待

一つの時代は、客観的に描きだすことはできる。だが、どの年齢でそれを経験したかによって、時代のもつ意味は違ってくる。90 年代に若者であった者にこそ、「失われた時代」という語りはリアルなものと感じられるだろう。他方この時代に子どもだった者にとっては、経済の低迷こそが所与なのであって、「失われた」という表現は実感の伴わないものであるに違いない。90 年代当時すでに大学教員だった者から、低学年の児童であった者までの幅広い年齢層を含む本書の執筆陣は、多様な 90 年代の像を浮かび上がらせている。

ところで 90 年代とは、どの期間を指すと著者たちは考えているのだろうか。90 年代初頭はまだバブルの気分が残っていた（ジュリアナ東京開業は 91 年）。若者の就職状況が目に見えて悪化を始めた 93 年を 90 年代の始まった年と評者は考える。そして 90 年代は、この国がどういう方向に転ぶか皆目見当もつかない漂流の時代でもあった。その意味で、包摂主義の尻尾を残していた自民党を「ぶっ潰し」、新自由主義＝排除型社会の方へと方向転換を果たした 2001 年の小泉政権誕生をもって 90 年代は終わったのではないか。

様々な表象を手がかりに 90 年代の像を浮かび上がらせるという本書の意図は成功を収めているが、いくつかの欠落があることも事実である。90 年代には経済の停滞のなかでも東京はまだしも豊かさを保ち続けていた。他方、近隣諸国からの安い農業工業産品の流入と生産拠点の海外への移転、さらには公共事業の削減と種々の規制緩和によって地方の経済は壊滅的な打撃を受けていたのである。90 年代の日本は、「東京」と「地方」に引き裂かれた。ところが、「郊外」には積極的に言及している本書も「地方」に触れてはいない。

もう一つの重要な論点は労働である。90 年代に、この国の労働の世界は大きな転機を迎えた。景気の低迷は若者の労働市場を収縮させ、多くの「フリーター」が生み出された。日本企業が終身雇用の「日本的経営」を転換したことによって、また新自由主義的な規制緩和によって、「リストラ」が横行し非正規雇用の労働者が飛躍的に増え始めた時代でもある。労働の世界のこうした変容を浮かび上がらせる表象は数多く存在したはずである。「癒し」ということばの流

行も、こうした労働の世界の変容と深い関わりがあると思うのだが。

本書は 90 年代を、「本来性の神話」と「他者性との戯れ」が綱引きを演じた時代として浮かび上がらせていた。東日本大震災と福島第一原発の事故を通過した 2010 年代の現在の地点からみると、この綱引きは「本来性の神話」の圧勝に終わったと言わなければならない。大震災の直後には、苦しい状況に耐えて整然と行動する被災者たちの姿が讃えられた。それこそが東北人の、否日本人の本来的性格であると喧伝されていたのである。そして「美しい日本」の「本来性の神話」を強調する首相が、大きな国民的支持を集めている。

90 年代は過剰な想像力の時代であった。オウム真理教事件も酒鬼薔薇の事件も、想像の世界での出来事が現実の世界に越境して生じた悲劇であった。その美的文化的価値に疑問符はつくものの、少女たちも「同人」たちも、過剰な想像力を大胆かつ豪快に表現していったのである。それに比べ 2010 年代のいま、何故かくもみな従順で大人しくなったのか。何故かくも想像力が禁圧されてしまったのか。その謎を解く鍵は 00 年代にあるに違いない。この卓越した知的集団によって 00 年代論が書かれることを切望してやまない。

（こたに さとし　大妻女子大学人間関係学部）